鹿児島県立自然公園の見直しについて

ギャップ分析を用いた広域的な総点検

キーワード：県立自然公園, 総点検, ギャップ分析, 新規指定, 見直し

九州インフラマネジメント技術部　東口（ひがしぐち）　晃久（てるひさ）・豊田（とよだ）　治（おさむ）・長谷川（はせがわ）　雄太（ゆうた）・中野（なかの）　太九朗（たくろう）

はじめに

鹿児島県立自然公園では、指定当時に比べ、自然環境に関する科学的知見の集積が進むとともに、生物多様性などへの住民の関心・要請が高まり、エコツーリズム等の利用が増加し、より深い自然体験を求める利用形態が望まれるようになるなど、公園利用のあり方が変わり、県立自然公園をとりまく状況が大きく変化しています。そのため、「生物多様性鹿児島戦略」（平成 26 年 3 月）において県立自然公園にふさわしい自然の風景地について改めて評価する総点検が、戦略的取組とされ、平成 28 年度から県立自然公園の総点検が始まりました。

総点検では、環境省の国立・国定公園総点検事業で採用されたギャップ分析を用い、①今後、公園の新規指定や既存の県立自然公園の大規模な拡張を行う「新規指定及び拡張検討地域」、②今後、主に保護規制計画の変更や現状に合わせた公園区域の見直しを行う「見直し検討地域」、③現段階では県立自然公園として検討しないが保護すべき資質を備えている「その他重要地域」を抽出し、整備優先度を設定しました。鹿児島県ではこの結果に基づき、県立自然公園の新規指定・見直しが行われています。ここでは、県立自然公園の総点検で用いたギャップ分析とその結果に基づき見直しをおこなった「吹上浜金峰山県立自然公園」の事例を紹介します。

県立自然公園総点検で用いたギャップ分析

ギャップ分析は、①「生態系の観点および地形地質の観点で重要な地域」と②「各種法令などの保護地域」とを地図上に重ね合わせ、③「保護されていない重要な地域」を抽出する（①－②＝③）分析手法です。生態系として自然植生、重要湿地、藻場・干潟・サンゴ礁、保護上で重要な種の集中分布域等、地形地質として山地、湖沼、海岸等の重要な地域、保護地域として国立・国定公園、県立自然公園、自然環境保全地域等の情報を収集整理しました。これらを GIS 上で重ね合わせることで重複状況を視覚的にわかりやすく表現しました。また、今回、国立・国定公園総点検事業のギャップ分析になかった新たな取組として、人と自然とのかかわりを示す身近な風景も評価するため、環境省の整理項目に情報を追加するとともに、重要な地域の抽出条件を変更しました。

特徴 1　追加収集データ

県立自然公園では“人と自然とのかかわりを示す身近な風景”として重要な地域を抽出するため、文化・観光、二次林・二次草原などの情報を収集・整理しました。

鹿児島県立自然公園総点検で追加収集したデータ

1. 主な基礎データ
   景観計画区域、景観地区・準景観地区、都道府県指定文化財、観光資源、ジオパークエリア・ジオサイト、日本の地形レッドデータ、森林計画図（民有林）、森林簿（民有林）
2. 人の利用面からみた重要な地域に関する主なデータ
   二次林・二次草原、里地里山、海鳥の生息地として重要な地域、人と自然とのふれあい活動の場（九州自然歩道など）

特徴 2　重要な地域の抽出条件

国立・国定公園総点検事業では、重要な地域の抽出に規模を設定していますが、県立自然公園では規模に関わる条件を与えず、小規模な地域も抽出しました。

鹿児島県立自然公園総点検での重要な地域の抽出条件

重要な地域	環境省	県立自然公園
典型的な自然植生	10,000ha 以上	制限なし
代償植生（二次林・二次草原）	抽出しない	抽出する
藻場	100ha 以上	制限なし
地形・地質	全国的に最も際立った特徴を持った地域	制限なし

図1　県立自然公園総点検で追加収集したデータと重要な地域の抽出条件

ギャップ分析の結果

ギャップ分析により把握した自然環境（生態系および地形・地質）の観点で重要な地域を図２に示します。これに有識者や地元自治体へのヒアリング結果、過去の県立自然公園の検討経緯などを踏まえて選定した結果を図３に示します。「新規指定及び拡張検討地域」として、過去に自然公園の候補とされ、現在でも自然環境の観点からみて重要な地域が相当規模存在する「南薩地域」「三島村」「種子島」「大隅南部」を選定し、「見直し検討地域」として、既往の県立自然公園で主に保護規制計画の見直しを想定する「トカラ」「川内川流域」「阿久根」「藺牟田池」を選定しました。

また、その他保護規制を検討すべき「その他重要地域」７地域を抽出しました。

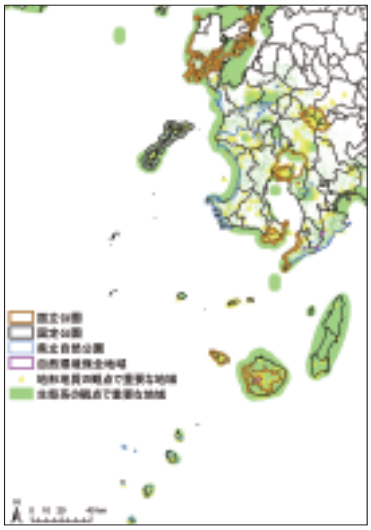

図2　ギャップ分析の結果

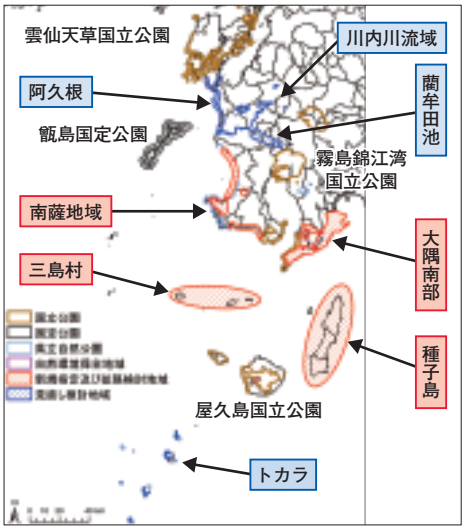

図3　候補地域の選定結果

吹上浜金峰山県立自然公園

総点検後、いちき串木野市、日置市、南さつま市に分布し、日本三大砂丘の一つを有する「吹上浜県立自然公園」（図４）が最初に見直されました。本公園については、過去に編入が検討された金峰山とギャップ分析によって抽出された沿岸海域の大規模な拡張が目玉でした。金峰山については、保護上重要な植物種や自然林が確認され、古くから山岳信仰の対象であるなど環境文化景観を有することから、山頂部は自然環境保護を目的に第２種特別地域に、その周辺は麓からの景観保全や特別地域の緩衝帯として普通地域に指定されました（図５①）。その他開発による土地利用の変化に対しては、公園区域や保護規制計画が見直されました。沿岸海域（図５②）は、開発行為に対し措置命令が可能になるよう普通地域への拡張を検討しましたが、諸事情により見送られました。また、今回の見直しに伴い、公園名称は「吹上浜金峰山県立自然公園」となりました。

図4　吹上浜県立自然公園

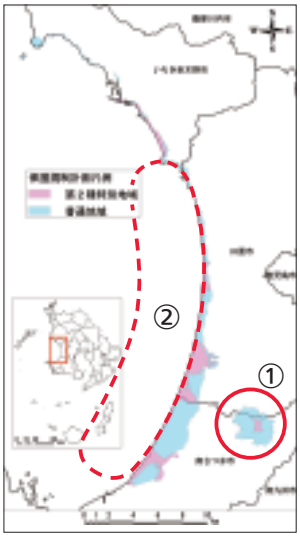

図5　吹上浜金峰山県立自然公園

おわりに

今回、ギャップ分析に基づいて県内全域を客観的かつ科学的に総点検し、今後の自然公園の見直しを計画し、さらに多様化する優れた自然の風景価値に対応した身近な風景の評価も試みています。様々な土地開発が進む一方、保護すべき地域はまだ多く残されていると考えます。次世代に優れた自然環境を継承するためにも、自然環境の観点から重要な地域が抽出できるギャップ分析は有効な手段の一つです。総点検は国の補助事業ではないため、予算確保が難しいものの、ギャップ分析は今ある資産ですぐに実行でき、技術的な展開も容易です。